― 日本被団協ノーベル平和賞受賞を記念して ―

ゲンバクとよばれた少年

東京芸術座による朗読構成劇『ゲンバクとよばれた少年』（講談社刊）

著者／中村由一
聞き書き／渡辺考
脚本・構成・演出／北原章彦
（「未来」「パンプキン！―模擬原爆の夏―」「医者の玉子」）

絵／宮尾和孝

【上演意図】

「キノコ雲の下で何が起きていたのか」を80年にわたり発信してこられた日本被団協の皆さんへの、敬意と連帯の思いを込めて上演いたします。
本作品を朗読劇として、より多くの方々に伝えてゆきます。

【作品内容】

祈りの長崎を象徴する浦上天主堂（現カトリック浦上教会）は原子爆弾で一瞬のうちに破壊されました。この浦上の地にはキリスト教信者を監視する目的で被差別部落がおかれていました。
朗読劇は大阪市立貝塚第二中学校の修学旅行生を前に中村由一さんが半生をお話しする構成になっています。

【プロフィール】（講談社のHPより）

著：中村由一

1942年10月、長崎県生まれ。1945年8月9日、2歳10か月のときに自宅で原子爆弾に被爆して大けがを負う。長崎市内の小学校に入学するが、そこでさまざまないじめを経験する。中学卒業後、希望の会社に入れず、船の修理工場、靴職人の見習いなどを経て、長崎市内の郵便局に就職。1999年に57歳で退職するまで、不自由な足で郵便配達を続けた。40歳を過ぎたころから部落解放運動に取り組み、自身の被爆体験や被差別体験を語り続けている。

聞き書き：渡辺考

1966年、東京都生まれ。NHK入局、聞き書き当時は福岡放送局ディレクター。中村由一氏へのインタビューを中心に構成した『原爆と沈黙～長崎浦上の受難～』（NHK・ETV特集、2017年8月放送）を担当した。
ドキュメンタリー映画『father カンボジアへ幸せを届けたゴッちゃん神父の物語』（新日本映画社、2018年4月公開）では監督を務めた。著書に『もういちどつくりたい テレビドキュメンタリスト・木村栄文』（講談社）などがある。

東京芸術座は1959年の創立以来広く人々の魂に真実への愛と勇気と熱情が育つ舞台を創ることを目的に演劇活動を全国的に展開しています。

東京芸術座　〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-19-11　TEL 03（3997）4341（代）　FAX 03（3904）0151